第47回

アトリエ訪問

染織（江戸小紋 重要無形文化財保持者）小宮康正先生

東京・新小岩にある、創業百十一年の小宮染色工場を訪ねました。この度は認定おめでとうございます。先先代の小宮康助さん、先代の小宮康孝さん、そして康正さん。三代続けて重要無形文化財保持者に認定されていらっしゃいます。三代続けての認定は初めてのことと思います。工芸会のこと、仕事のこと色々とお伺いしました。

仕事の工程を伺いました

江戸小紋は、渋紙（和紙を二枚から四枚重ねて、柿渋で張り合わせ出来た紙）に模様を彫り、その型紙を使って染めてゆく型染という仕事。まず「型付け」の作業をする。薄暗い工房の中には、七m二〇cmのもみの木の一枚板が整然と約四〇枚並んでいる。生糊（もち粉と石灰で出来た糊）が塗られた板に霧吹きで水をかけ、糊の粘りを戻す。そこに白生地を貼って、型紙を置き、糊をへらで塗ってゆく。型紙が彫られたところだけ糊がついて模様のところは生地のままで残る。防染糊のため、そこだけ染まらないようになっている。生地を干すことで糊を乾かし、「しごき」（糊の中に染料を混ぜ込み、へらで生地全体に塗る）と呼ばれる地色染めをし、それを蒸して、きれいに糊を洗い落とす。

＊作業はそれぞれ早ければ早いほど、良い仕事。その為の段取りと腕を磨くことが大事。

先先代、先代のお話しを聞かせて下さい

祖父は、伊勢型紙が滅びる前にと、向こう百年分の型紙を作らせて残したんです。でも、当時、彫られた型は一切使用していません。なぜなら、現在の紙漉き職人がいて、鍛冶職人がいて、型紙職人がいるから、今の人達の仕事も必要になる。次の世代が育ってはじめて伝統はつながります。百年分の型を作るという仕事が、江戸小紋を支えるこやしになっていることが素晴らしいことなんです。私も一年に使う量の二〇倍の型紙を注文し、型紙職人が仕事のできる環境をつくり続けている。

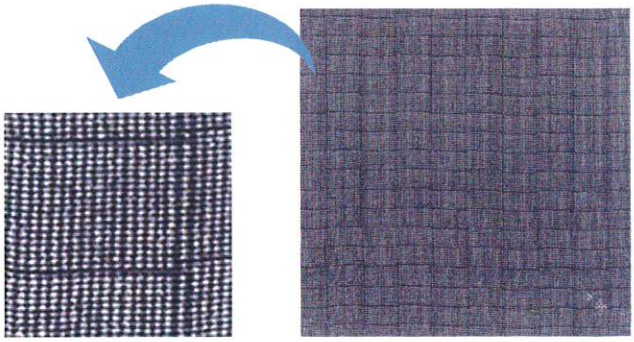
古い話しになるけれど、昭和二十年代前半に、祖父の康助のもとに型紙を売りに来たが、その型紙を買わなかった。父がなんであの型紙を買ってくれなかったんだ。そしたら祖父康助は「その型紙を世の中に泳がしておけば誰かが小紋屋をやる。その金があるんなら新しい型を彫れ。世の中に新しい型が増えるじゃないか」と言った。次の世代に何ができていくか。次の時代にそういう技を伝える。これが重要無形文化財の無形なんですよ。人から人へ技術を伝えていくっていうのが重要無形文化財保持者の使命と考えていた。また定義なんですよね。

工芸会の中で小紋のかかえる問題

仕事が自分の限界を超え、自分の腕よりも高度な仕事を要求された時にどうにも汚さというものが出てくる。それを工芸展として認めるかどうか。技術的にレベルを下げても、きれいな作品を出して行くべきか。議論の余地があると思うが、私は挑戦して残していくべきだろうと考える。我々はずーと挑戦していかなくてはいけないんじゃないかという思いがある。その腕を凌駕すればきれいになる。それを目指すべきじゃないか。審査員が何をもって審査していくかによって、工芸会の方向性ができてくる。工芸を次の世代にどんな風に送っていかなきゃいけないかを考えなければいけない。

今、している仕事の中で、どんな問題にぶつかっていらっしゃいますか？具体的にお話し下さい

以前、工芸展に出品した連子（格子）※という型があるけど、三cmの中に四七本縞があるということは、四五本で一ミリ三ツ割。彫るのに三ヶ月かかる。彫る人間も限界だし、染める人間も限界を超えちゃっている。風前の灯火。ここまでくると職人芸もありますが、色々なものが整わなければ仕事はできない。一枚の型紙を作るために三ヶ月かかるから、三ヶ月分のお給料を払わなければならない。彫り師を抱えないことには、良いものができない。原材料の糠（ぬか）がなくなる。紙がなくなる。絹がなくなる。無くなるって言うんじゃなくて、悪くなる。悪くなって残る可能性はいくらでもある。これだけの柄ができていたのに、今はできない。彫れない。そういう意味では、もう小紋屋がこの柄は出来ませんなんて恥なんです。ただ、そういう時代になってきている。



拡　大　　※突彫小紋組み違い連子（色違いの袱紗）

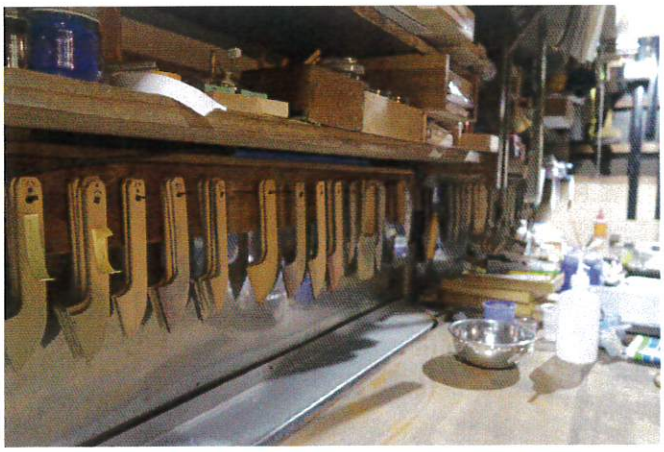
型紙のお話しを伺いたいのですが？

良い紙。ただ良い紙って何？解らない状態でもって作っていく。そうすると型紙原紙というのを、自分たちでもって考えながら試行錯誤していき、紙屋さんと打ち合わせして、どういう紙が良いのか。今、言葉で言ったら簡単です。それは緻密な紙。何故かというと型紙というのは、穴と穴の間隔が0・3ミリ。だから0・3ミリにして弱いか強いか。そうしたら緻密な繊維がびっしり入っていた方が強い。この緻密な紙に行き着くのが大変なんですよ。使ってみないと解らない。ですから目標が見えない状態でもって、ものというのはどんどん作りながら目標が一歩ずつ登ってゆく。毎日毎日を考えながら、努力をしながらやっていかないと良いものは出来ていかないのです。

型紙の話しから、仕事に向かう時の心構えのお話になりました。どうしたら良い作品を作ることができるでしょうか？

私一人で出来るものというのは限られている。皆、どんぐりの背比べ。その中でもって良いものを作っていこうと思ったら、環境を整えるしかない。型紙の環境を整えるとしたら、和紙をきちんとすることによって、良い型紙ができれば、我々の仕事のレベルも上がる。出来上がった使い易い型紙を型屋さんに提供して、良い型を彫ってもらう。

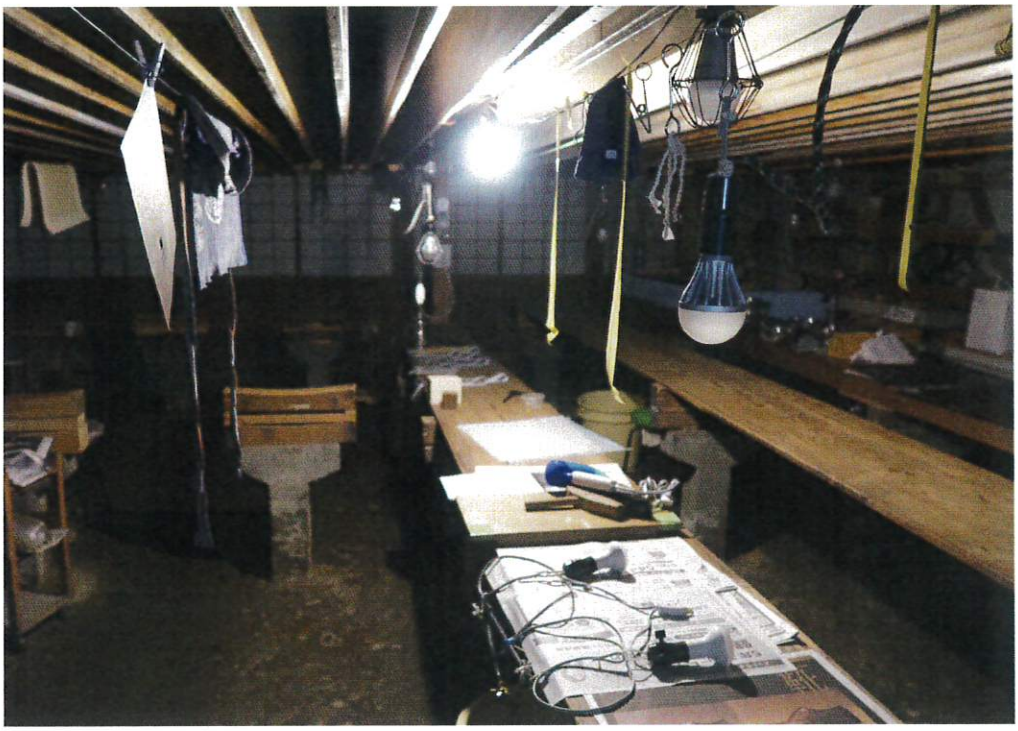
へらも一枚一枚のあたりが違うという話しをしたら、親父が昔のへらは割っているはずだぞと言って、へら屋さんにお願いして作ってもらっ



へら、道具類

た。目標が見えてない状態でものを作っていかなければならない。毎日、物を使うなり作るなりしていく工程で、色々な問題が出てくる訳なんですよ。ですから私たちというのは、目標があって作るんじゃなくて、目標がない状態で良いものを作っていかなければならない。工芸は形の無いものを、人から人へ繋げて行かなければいけない。技法、技術もどんどん変わっている。

私の時代は、へらをこんな風に持てとしか教えてくれない。後はやれ。そうすると人の登っていくピークというのは限られている。これはスポーツの世界と同じで、後は下るだけ。上まで登るまでにどうしたらいいかって考えたら、歳が若い頃から仕事を始めるということなんです。仕事を始めるのが遅かった人には、理論なんですよ。これは何かというと、体をどう使ったらいいか、もちろんへらの持ち方も教えてあげる。これをマニュアル化すると仕事に無駄がなくなる。自分でもって自分を解析する。どうやっているのだろうって分析する。頭で覚えさせるとすーと上っていく。しかし、その先行くと才能なんですよ。私は才能っていうのは信じてなかった。努力さえすればそこまで絶対に行くと思っていたが、才能というのはある。下から見たら上の才能はわからない。全部一緒。上から見ると、この人間は才能があるか全てが解る。今になって、仕事をしていて江戸小紋ってこんなに難しいものなんかと、実は思っている。



板場

三階建倉庫

工芸会の若い人にひと言

一日一日を、一生懸命仕事に向き合うしかないでしょうね。仕事に関わる全てを、一つ一ついろんな工夫をして、その中で目標が出てくる。作りながら目標は変わってくる。目標があってものを作るのは作業。今の時代を生きる人間は、今の空気を吸っている訳で、伝統も今の時代を生きられなければ繋がらない。この時代を生きる為に、今の時代に即した仕事をしないと結局食べては行けないでしょう。形の無いものを伝える。技法も技術も変わって行く。

閑話休題

康正さんは、スキー一級の腕前。奥様は山登りがお好き。よくお二人で山へ出かけているそうです。仕事も趣味もご一緒の仲睦まじいお二人です。

染織部会で二次会の居酒屋さんへ。鍋の段取り、ホッケの身開き方などなど。なんでも手際よくできてしまう。家の改装をした時も、漆喰まで自分で塗ってしまったそうです。

最後に

ひたむきに江戸小紋と向き合う小宮さんの仕事。自分の仕事にかかわるすべての事を、例えば結城紬の生地から蚕まで。糠の話しからお味噌づくり。彫りの道具から砥ぐということ。自分が納得の行くまで追い続ける姿勢が凄い。それはすべて、より良い仕事、今を生きて行く為の仕事につながるということ。息子さんの康義さんも工芸会でご活躍中です。室町時代からの小紋の歴史。今後どんな風に発展してゆくのでしょう。難しい現実も沢山伺いました。どうぞ健康に留意なさって益々のご活躍を祈ります。長い時間、貴重なお話をして頂き、ありがとうございました。

今回、新しく広報委員長になられた人形部会の松崎幸一光さんが、御一緒してくださり、感想を書いて頂きました。

九月二十四日午後、この度重要無形文化財保持者に認定された、小宮康正氏の新小岩にある仕事場に染織の平山八重子さんと藍田愛郎さんとお伺いした。東京の下町である新小岩の駅を降り、懐かしい街並みを抜け、荒川の土手に隣接する工房に向かった。遠くからもはっきりと分かる小紋の型紙を保存する3階建ての倉庫（蔵のような趣がある）を目印に住宅と町工場が立ち並ぶ中を工房に向かった。小宮染色工場と表札のある時代を感じる門構を抜けると、中庭風の広い空間を囲むように幾つかの古い建物があり時間が少し逆戻りしたような不思議な感覚を覚えた。母屋から小宮氏が顔をのぞかせ、まずは板場を案内してくださった。暗く冷たく湿気を感じる空間はさらに時間を遡る気分である。目に映る全てに時間の蓄積を感じ、作り出される作品の深みが見えたような気がした。暗い中、裸電球一灯で行う型付けの作業は、置いた糊の厚みを見極めて型紙を置くためとお聞きしその感を強くした。また、長板が頭上に整然と並ぶ板場の土間は南側の窓からの光を受けやすいようにと、わずかに傾斜しており黒く湿気を含んだ土、長板を置く馬、これも高さを調節するため幾重にも修正されている。全てはより良いものを求めての結果である。至る所に仕事への工夫を見ることができ興味深く拝見した。その後、型付けをした裂地の蒸し場、糊を落とす水場、等を拝見した。母屋に移り用意していただいたプロジェクターの映像を拝見しながら仕事についてお聞きした。型紙のこと、糊のこと、道具のこと、裂地のこと、今後継承して行く上での問題点など、長い時間をかけてお話しをお聞きし、自分にとっても有意義な時間となった。伝統工芸にかかわる人間にとっての共通の課題ではあるが、それらの事例一つ一つに答えを出し、次代にどのように継承してゆくか、考えさせられたアトリエ訪問となった。仕事に対する情熱と鍛錬、時代を見極め融合できるか問われていると感じた。

松崎 幸一光　記

編集・撮影　平山八重子
　　藍田　愛郎

小宮染色工場・ご自宅にて
二〇一八年九月二十四日

※第三十回日本伝統工芸展出品作「突彫小紋組み違い連子」は文部大臣賞を受賞されています。

お母様が亡くなられて４年間、
ずっと庭にある南天を生け続けている